

# せいかつぶん か ひと か ていしゅつ 生活文をかこう！（書きたい人が書いて提出します）

## せいかつぶん ないよう 生活文の内容



生活文は、毎日の生活のことか、自分で調べたり観察したりしたことを書きます。

### ●毎日の生活のことを書くとき

毎日の生活の中で、発見したことや、感動したこと、自分が成長した（かわった）ことをくわしく書こう。

### ●自分で調べたり観察したことを書くとき

調べたり観察したりしていく中で感動したことや、考えたことをくわしく書こう。

また、調査や観察中の苦労や工夫、成功した喜びを、生き生きと書こう。

## せいかつぶん じすう 生活文の字数

原稿用紙は、**B4サイズ**です。



1年……………1, 200字以内（400字づめ原稿用紙 3まい以内）

2・3年……………1, 200字～1, 600字（400字づめ原稿用紙 4まい以内）

4・5・6年…1, 600字～2, 400字（400字づめ原稿用紙 6まい以内）

※題名、学年（算用数字）、名前は、欄外（マス目の外）に書きます。

# し たんか はいく か ひと か ていしゅつ 詩・短歌・俳句をかこう！（書きたい人が書いて提出します）

## し たんか はいく ないよう 詩・短歌・俳句の内容

詩は、毎日の生活の中で感動したことや心に残ったことを書きます。

書くときは、ドラマチックに生き生きと書こう。

## し じすう 詩の字数

原稿用紙は、B4サイズです。400字づめ原稿用紙（**字数制限あり**）

※題名、学年、名前は欄外（マス目の外）に書きます。



## たんか はいく じすう 短歌・俳句の字数

句数の制限はありません。1首・1句でもいいし、いくつか書いてもいいです。

原稿用紙に書いて提出してください。 ※題名、学年、名前は欄外に書きます。

ていしゅつ び

**提出日 8月20日(火)までに学校に持ってきてください。**

がっこう も

※8:10～16:40の間にご提出ください。なお、8月9日～15日学校閉庁日の為、提出できません。

○けいけんをとおしてかんじたことをかく

## よるのひみつ

木・一

わたしには、ねむるときにぜったいにいるものがある。それは、タオルだ。

そのタオルは、三さいのころにおばあちゃんからもらった。きいろで、ミッキーやミニーちゃんがかいてある。いままで、どこにいくときももっていく。だいたいじなだいたいじなタオル。だから、ねるときに、かならずつかう。

わたしは、タオルがなかったら、なきそうになつてねむる。なきそうになるのは、さむいからだ。タオルをぎゅっとしてねる。そうすると、からだがあつたまり、あんしんしてねむれるみたいだ。

また、へやがまっくらになると、ちよつとぶきみでこわい。だから、おかあさんに、

「ろうかだけ、でん気をつけて。」

という。すると、おかあさんがでん気をつけてくれるので、ひとあんしんしてねむれる。

それでも、なかなかねむれないことがある。そんなときは、すこし本をよむ。本をよむとのかがかわくから、おちやをのむ。そうすると、ねむくなつていく。それでも、ねむれないときは、お気に入りのタオルにくるまったり、おふとんのひんやりするところをさがしたりする。とくいなのは、足をかべにくつつけて、エビフライのまねをすること。おもわずたのしくて、ずっとあそんでしまう。それで、なかなかねむれなくなる。

わたしが、いちばんさみしいのは、おねえちゃんとおかあさんが、先にねてしまうときだ。おかあさんがいるときは、おかあさんのおなかに足をのせる。おかあさんがいないときは、おねえちゃん

んのおなかに足をのせる。足があったかくなって、ねむりやすくなる。だけど、おねえちゃんは、ときどきいやがるから、こまってしまう。おねがいしてもだめなときは、あきらめる。でも、おねえちゃんが、わたしよりもはやくねたら、おねえちゃんをくすぐっている。おねえちゃんのおなかを、こちよこちよしても、いいんとしている。目をさまして、おこるかなとおもうけど、いいんとしている。おもしろくないから、タオルにくるまって目をしてねむる。

このまえ、おかあさんに、

「きのうのよる、なっちゃんは、おねえちゃんの足をつかんでねていたよ。」

といわれた。わたしは、つかんだおぼえがなかったから、

「えっ。」

といった。とてもびっくりした。どうして、おねえちゃんの足をつかんだのだらう。わたしが、か

んがえているとき、おかあさんとおねえちゃんが、かがくけんきゅうのよそうのはなしをしていた。わたしもよそうした。きっと、はやくねむれるくせをつけるためだったんだ。

わたしは、よるねむるときに、ひつようなものが二つあることがわかった。きいろのタオル。そして、おねえちゃんの足だ。これからは、おねえちゃんもタオルのように、だいじにしたいとおもった。

## ぼくのかわいいは

小・1

「かわいいはだね。」

ぼくのおかあさんはいう

ぼくはとてもうれしくなる

だからだいにだいにし

にがてなはみがきだって

かわいいはのためなら

がんばれる

だけとあるひ

だいすきなパンをたべていたら

ぼろっとぬけちゃった

ぼくはとてもあせった

だっておかあさんに

かわいいはだねって

いってもらえなくなる

ぼくのかわいいははもうない

ぼくはかなしくてないちゃった

おかあさんはびっくりしてたけど

すぐになつこりわらっていった

「かっこいいはがはえてくる

ね。」

「えっ。またはえてくるの。」

ぼくはなみだをふいて

おかあさんにいった

「かっこいいはも

だいにするね。」

こんどは

ふたりでいっしょにわらった

まんまとだまされた

ゲームばかりしていないで

自然とふれ合おうと

山に遊びに行くことになった

自然は好きだけれど

ゲームをやっていたいな

ぼくは楽しめるかなと思った

「かめ池」という池があるらしい

大好きなかめがいると思ったのに

まったくかめは見つからなかった

実はこちらの形をした島が

ういているからかめ池だという

まんまとだまされた

夜おそくに

星空かんしようにさそわれた

星空がきれいだと聞いていたのに

雲が出てきて全く見えなかった

まんまとだまされた

天体望遠鏡を使って

星空を見せてくれると言ったのに

こわれるといけないからと

さわることもできなかった

まんまとだまされた

つりぼりで魚つりをした

ぼくは魚つりが大好きだ

たくさんつろうと思ったのに

食べる分だけつってねと言われて

二ひきだけつって

しゅうりょうとなった

まんまとだまされた

つぎの日はキャンプ場で遊んだ

ボルダリングとスラックラインに

初めてチャレンジした

運動の苦手なぼくには無理だと

親は言った

スラックラインの一本線の上で

かた足でかんたんに

バランスをとってみせた

みんなはおどろいていた

ボルダリングだって上まで登れた

みんなはまんまとだまされた

期待どおりにならなかったけれど

池まで山道をのぼったこと

ね転がって夜空を見上げたこと

ふだんやれないスポーツに

チャレンジしたこと

つった魚を炭で焼いて食べたこと

冷たくて気持ちよかった川遊び

もり上がった花火にバーベキュー

山道での動物の発見や虫の観察

自然の中には

楽しいことがたくさんあった

ゲームがなくても

十分おもしろかった

ぼくはまんまとだまされた

○体けんを通して感じたことをすなおに書く

## 車いすに乗って見えたもの

小・3

「ぼくも見たいのに。」

思わずぼくは声を出した。でも、それはまわりに  
は聞こえないような小さな声で。

ぼくたち家族は、旭山動物園に来ていた。大きな  
ガラスの前には大ぜいの人が集まっていた。中には  
チンパンーがいろいろらしい。時どきみんなのかん声  
があがる。チンパンジーが何をしているのか気にな  
る。けれど、見えない。近づくこともできない。遠  
くから、かん声のあがるせなかを見ていた。ぼくは  
今、車いすに乗っている。

旅行で北海道に来て二日目、ぼくはけがをした。

ビデオカメラでさつえいしながら歩いていたら、足  
元にあった木に気づかず、足を引っかけて転んでし

まったのだ。ひざのあたりを大きく切ってしまった。  
ぼくは、きゆう急車で病院に運ばれた。そして、き  
ずが深かったのですぐに足をぬうことになった。

次の日、お医者さんのきよかをもらったので、旅  
行をつづけることになった。足がまだ少しいたかつ  
たので、次の旭山動物園では、車いすをかしてもら  
うことにした。ぼくはきゆう急車につづき、はじめ  
て車いすに乗ることになった。

旭山動物園では、お父さんが車いすをおしてくれ  
た。急な坂が多く、おしてくれるお父さんはすごく  
大へんそうだった。だから、ぼくは、自分の手で車  
いすを動かしてみた。すると思うように進まなかつ  
た。真っすぐ進まず、右や左に曲がってしまった。  
少しのだんさもこえるのがむずかしかった。上り坂  
は手だけで上るのは大へんだったし、ずっと力を入  
れていないと後ろに下がってしまう。下り坂は、ブ  
レーキをかけないとスピードが出てしまいこわかつ  
た。車いすに乗ることは、自分が思っていたよりも  
ずっとむずかしかったし、大へんなことだった。

車いすに乗ることより大へんだったのは、車いす  
でいることだった。車いすは、すわるので目線がひ  
くくなる。目線がひくいので、他のお客さんが大ぜ  
いいると、動物を見ることができなかった。そんな  
ときは、お客さんがへるのを待った。だから一つの  
動物を見るのもいつもよりずっと時間がかかった。  
なかなかお客さんがへらず、見るのをあきらめた動  
物もあった。ぼくも見たいのに。そう思うことも何  
回もあった。

エレベータは、ベビーカーや車いすがゆう先され  
ていた。けれど、エレベータはあまり大きくなかつ  
たので、ベビーカーとその家族が乗るとまん員だつ  
た。だから、やっぱりここでも待たなければならな  
かった。待っているとき、車いすじゃなかったら階  
だんをトントントンって上がるのについて思った。

車いすでいることはすごくふべんだし、大へん  
だった。けど、車いすで園内を回っているとたく  
さんの親切や心づかいに出会った。エレベータを  
乗ったとき、ぼくが出るまでボタンをおしてとびら

を開けつづけてくれた人がいたし、地面のくぼみに  
車いすがはまって出られなくなってしまったとき、  
外国人のかん光客の人が何も言わず、え頭でおして  
出してくれたこともあった。

人気のアザラシの水そうの前には、見やすいとこ  
ろに車いすの人ゆう先の場所が用意されていたし、  
ちゅう車場に車をとめるとき、車いすをかりること  
をつたえたら、入口に近くて、広く平らな場所にあ  
ん内してくれた。

ぼくは、車いすを使って、いつもは気づかないよ  
うなことに気がつくことができた。車いすにとって  
は小さなだんさや坂が大へんなことや、がまんした  
り、あきらめたりしなさいいけないことがあること。  
そういうのをバリアっていうことをお父さんから教  
えてもらった。そして、そういうバリアをなくすこ  
とをバリアフリーっていうことも。ぼくは自分がし  
てもらったような親切や心づかいで世界中をいっば  
いにして、車いすの人ががまんしたり、あきらめた  
りしなくてもいいようにしたいなと思う。

○経験から気づいたことや感じたことを書く

## ま法の言葉

小・6

ぼくは最近、世間でいう反こう期というやつらしい。

よくお父さんとお母さんがそう言っているのを聞く。自分ではよく分らないけれど、お父さんやお母さんから言われるちよつとしたことで腹が立つて強い口調で言い返してしまう。そしてケンカが始まるともう止まらない。

ぼくには四才年下の妹がいる。妹ともよくけんかをしてしまうのだけれど、妹から先に手を出してきて完全に妹が悪いときだつて毎回ぼくがおこられる。ある日、二人でリビングで宿題をしていると、妹がえん筆を机にぶつけてカンカンと鳴らしてきた。集中しているぼくは妹に、「やめて。」と声をかけるが、「別にやってないし。」と妹は反こうする。がまんできずにこづくと妹は泣いてしまう。するとお母さんが決まって登場。「やめなさい。」

何をしているの。」「みゆが先にちよつかいをだしてきたんだ。」「はいはい、分かりました。でもお兄ちゃんだからがまんしないとだめじゃない。」「この言葉を聞くと、むちゃくちゃ腹が立つて、ぼくは自分の部屋に閉じこもる。このことを友達に話すと「おれも同じようなことがある。」「と同感してくれた。自分だけだと思っていたから、意外にも分かってくれる友達がいて、何だかうれしかった。

どうしてぼくだけおこられるんだ。それに妹へのおこり方とぼくへのおこり方がちがすぎていて本当に腹が立つ。妹とのけんかが原因でまたおこられたときに、ぼくはお父さんとお母さんにおこり方のちがいについて聞いてみた。すると「いつも二人とも同じようにおこっているよ。」と二言っていた。でも絶対にちがうんだ。明らかにぼくの方がひどくおこられている。そういつてまたお父さん、お母さんと大げんかが始まる。二人はぼくに「謝りなさい。」と言ってきた。絶対に謝るものか。ぼくは謝らなかつた。なぜならそのときぼくは、絶対に悪くないと思ったから。

親は決まっていつもこういう。「親に向かって何なんだ。謝りなさい。」と。そのときいつもぼくは思う。どうしてぼくばかり謝らないといけないんだ、と。以前、ぼくが悪くないけんかがあった。ぼくは何もしていないのに、テレビをめぐって、妹がたたいたり、悪口をいつてきたりした。すると、となりの部屋にいたお父さんが「うるさい。後ろに行って見てなさい。」と、急にぼくにおこりだした。しかし、くわしいことをお母さんが妹に聞くと、妹が悪いことが分かった。でも、お父さんはぼくに何も言ってくれない。本当は悪くないぼくに謝るのが筋ではないのだろうか。ぼくからしたら理解不能だ。大人ってずるいなって思う。自分たちが悪いことをしても絶対に謝らないのに、ぼくたち子どもには謝れだなんて、おかしいし理不尽だと思う。もちろんぼくが悪いときもあるけれど、大人が素直に謝れないのに、子どもばかりが謝らないといけないなんて何だか変な話だと思う。大人なのにどうしてたった六文字の「ごめんなさい」が言えないのか。全く分らないし、お父さんやお母さんが悪いときに素直に認めて謝ってくれたら、ぼく

だって自分が悪いときは素直に「ごめんなさい」が言えて解決するのになと思う。

でもある日、そんな思いをくつがえす出来事があった。その日、ぼくはまたお母さんとけんかをした。ああ、おこられる。心の中で思ったそのとき、お母さんの方から「ごめんね。」

と言ってきた。ぼくはすぐおどろいた。と同時に自分もお母さんに対して謝らなければ、と自然に、

「ごめんなさい。」

が出た。いつもはなかなか言えない「ごめんなさい。」がこのときはなぜか素直に言えた。

部屋に戻ってぼくは考えた。どうしてあんなに素直に言えたんだろう。「ごめんなさい」ってなんだかすごい言葉かもしれない。けんかをして、おたがい心の底から素直に「ごめんなさい」と謝ったら、さっきまでのわだかまりがうそのように消える。何事もなかったかのようにな元通りになれる。たったの六文字が魔法の言葉なのかもしれない。

でもやっぱり、まだまだ素直には謝れない。謝れない

けれど、あの日を境に、言い返すのではなく、心の中で「バカ」とさげんでがまんすることができるようになった。そして、少しずつ「ごめんなさい」が言えればいいなと思う。まだ少し時間がかかるかもしれないけど。

ぼくが大人になったとき、心の底から「ごめんなさい」と言える大人になりたい。「ごめんなさい」が素直に言えれば、問題も早く解決するし、こんなけんかも起こらない。相手や自分がいやな思いをすることもない。「ごめんなさい」このま法の言葉を胸に置いて、自分の間ちがいを素直に受け止め、成長できる大人になりたい。

## 名前を呼んで

小・6

「お母さん、行つてきます。」

今日から私は六年生

六年生になったから

一年生のお手伝いの毎日が始まる

一年生は

学校のことを何も知らない

だからやさしく教えてあげる

一年生が

自己しようかいをしてくれた

私は六年生だから

すぐに名前を覚えてあげよう

一年生は

「あのさあ。」

「ねえねえ。」

「どうやってやるの。」

と私に話しかける

私はその子の名前を呼ぶ

会う度、会う度

名前を呼んでいたら

「名前なんだっけ。」

やった、やっと聞いてくれた

うれしかった

「いちほだよ。」

照れながら言ったら

かわいい声で呼んでくれた

むねがふわんとする

うれしいな

私は四人兄弟の末っ子

兄や姉にあまえてきた

今度は私がかわいがる番だ

一年生は

「ねえねえ。」

「どうやってやるの。」

と私に話しかける

私はその子の名前を呼ぶ

会う度、会う度

名前を呼んでいたら

「名前なんだっけ。」

やった、やっと聞いてくれた

うれしかった

「いちほだよ。」

照れながら言ったら

かわいい声で呼んでくれた

むねがふわんとする

うれしいな

私は四人兄弟の末っ子

兄や姉にあまえてきた

今度は私がかわいがる番だ

一年生は

ちっちゃくてかわいい

めんどろを見るのも悪くない

一年生が私の名前を呼ぶ

六年生の友達はいつも

私の名前を呼んでくれていたけど

何だろこの気持ち

一年生に名前を呼ばれると

「何か困ってるの。」

と聞きたくなった。

思い出す

私が一年生のときも

六年生の子の名前を呼ぶと

「どうかしたの。」

「えっと、あのね。」

六年生の子が聞いてくれた

「ねえねえ。」

「あのね。」

と呼ばれるよりも

名前を呼ばれる方がうれしい

「私に任せて。」

とはりきってしまふ

今ではわたりろうかを歩くだけで

一年生が名前を呼んでくれる

私は手をふる

何だかプチコンサートみたい

長い休み時間

外に出ていると

だきついてくれる子

手をつないでくれる子

お姉さんになった気分

六年生になるまで

こんな気持ちはなかった

六年生になつて初めて味わった

これからも

いつでもみんなに呼んでほしい